

---

# パンドラな三毛猫 ～ 道化師の箱

たま

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

パンドラな三毛猫

↓道化師の箱

### 【Nコード】

N2082J

### 【作者名】

たま

### 【あらすじ】

第三次世界大戦が起きた世界。戦時中にアメリカと日本で共同開発された新型兵器『パンドラ』。その力で人は『能力者』になることが出来るようになった。彼らの活躍により、戦争は日本とアメリカの勝利に終わった。しかし、人より強い力を持った『能力者』の存在は戦後、隠された。

それから三年後、『能力者』達は裏の世界で暗躍していた。ある者はマフィア、ある者は秘密結社、ある者は国家権力。それぞれ裏の世界で表に存在を隠しながら戦っていた。

そして戦いに巻き込まれて『能力者』になった大学生と三毛猫が、自分たちを生み出した者達を探して、さらなる戦いに巻き込まれていく。

最後に笑うのは誰なのか。

## プロローグ（前書き）

はじめまして、作者のたまです。この作品は私の初作品です。なので、誤字や表現が至らない部分もあると思いますが、こつたほうがいい、と思うような所がありましたら、ご忠告いただけると嬉しいです。

では本編の方へどうぞ。

## プロローグ

第三次世界大戦が起こり、人類の三十パーセントが大戦に巻き込まれ、人口が減少した世界。

大戦に使われた新型兵器パンドラ。その力は『生物の遺伝子を書き換え、異能力を植え付ける』というものだった。日本でパンドラは開発され、アメリカで使用され始める。アメリカは敵である中東諸国にパンドラによって強化された兵を使い、勝利をおさめた。

だが、大戦で勝利しても大衆の倫理観に反するこのパンドラ、それにより生み出された能力者は大衆の支持を得られないと悟ったアメリカと日本の両政府はその存在を隠す為、一般人には大戦の情報をほとんど開示しなかった。

しかし、前大戦から三年もすると裏の世界では能力者達が認知され暗殺、抗争、犯罪に用いられるようになった。能力者の圧倒的な力が各国の治安を悪くするのに時間はかからなかった。能力者の影響を受けたのは第三次世界大戦の直前に君主制になった日本も変わらず、これ以上の治安悪化を恐れた皇族や政府、警察庁は『目には目を』という考えで能力者による捜査課『P・P・P（PANDORA・PEOPLE・POLICE）』を設立。これにより、治安の悪化が食い止められるかと思われた。

だが、『P・P・P』を設立しても治安回復には至らなかった。増える能力者達に歯止めをかけることも出来ず、治安は悪化の一途をたどり、もともとの法律の緩さや、政治家達の腐敗なども重なって、いつしか日本は犯罪大国世界第一位になっていた。

## 日本軍研究施設

「ふう、やっと完成だ。」

この博士の一言で、研究室にいた全ての研究員達は安堵の表情を浮かべた。中には抱き合って喜んでいるものもいる。

「あとは軍に渡せば仕事も終了だな。」

博士も椅子にもたれかかりながら、すっかり冷えたコーヒーを口に運ぶ。

「しかし、軍も難しい仕事を渡してきますねえ。普通の研究者ならこんな研究、途中で放り出してしまいますよ。だけどやっぱり宮田博士は違いますね。軍から要求された以上の仕事をやってのけるなんて。やっぱり博士は格が違う。」

と、研究員の一人が博士に話しかけた。

「止めてくれよ、そんなお世辞。だいたい、仕事なんだから気になる物は調べとかないと、もしそれが原因でこの兵器が問題を起こしたらどうするんだ？それこそこの研究所がとり壊されかねないだろう？」

と苦笑いを浮かべながら、博士は研究員に言った。その言葉に研究員は、

「いや、軍が宮田博士ほどの研究者を手放すわけないじゃないですか。何せ、二十一歳で軍の研究所の主任になり、様々な研究を成功させ、様々な賞を総なめにした天才なんだから。」

とさらに誉め称える。その他の周りにいる研究員も頷ている。博士は困ったように笑いながら誤魔化すしかなかった。その表情には、複雑な感情がひしめいていた。しかし、そんな博士とは裏腹に、研究室内は賑やかなムードだった。ガラス一枚を挟んで人を殺す兵器があることも忘れて。

しかし賑やかで笑いに満ちていた研究室は銃声が響いたことで悲鳴と恐怖に支配された。

一時間後、そこに研究結果である兵器 パンドラ の姿はなく、あったのは研究員の死骸と壊された研究データだけだった……。

## 幕開け 1

目覚まし時計の音で目が覚めた。午前七時。いくら一人暮らしになったからといって、昼まで寝るのはあまり良いことではない。大学受験もめでたく終了し、大学に入学出来た俺は念願だった一人暮らしをしている。

「今日は……午後から授業か……。午前中何してるか……。」

しかし、一人暮らしというのはなかなか暇であることに一人暮らし開始一週間で気付いた。家事と勉強、さらにサークル活動やバイト。大学に入れば充実した毎日を過ごせると思っていたが、家事は効率的にやれば単純作業でしかないし、バイトも（ファミレス）週三で入ってるのに、客が全く来ない。サークル活動に至っては主だった活動はしていない。というか新歓コンパ以降集まりがない。いま一番充実感があるのは勉強ぐらい。

「大学行って、勉強してるか……。」

結局いつもと同じ考えにいたり、大学へ行く準備をし出す。服は無難なものにして、髪型は特にセットせず、勉強道具を持って外に出た。

一人暮らしをしている部屋から大学までは最寄りの駅から二つ先の駅まで行き、その後五分程歩かなければならない。その大学までの電車の中で朝飯も食べずに家を出てきたことに気付く。確かに朝起きてから何も口に入れていない。だが、いくらバイトしているからといって、その辺の喫茶店で飯を食べば、学生には痛い出費になる。コンビニも同じ。だから、大学に入ってからよく利用している食堂で飯を食べる事にした。

大学に着いたのは午前九時頃だった。大学に入ると、まず図書館が目に入った。この図書館は近隣の人々も利用出来るようになってる。さらに、その蔵書量もそこの図書館の比ではない。どんなに探しても見つからなかった本が、この図書館を探せば大概是置いてある。いつもならここで勉強する為に入っていくのだが、今日は食堂で飯を食べてからになるだろう。

図書館に続く道から分かれている右側の道を行くと食堂が見えてきた。食堂の中はとても清潔感があり、とてもカジュアルな感じな内装だ。

「おばちゃん、スタミナ定食一つね。」

厨房からおばちゃんの、あいよー、という声が聞こえる。数分して出来上がったスタミナ定食を貰いながらおばちゃんにお金を渡し、スタミナ定食が乗ったお盆を自分の席に置いて、食べ始める。

食べながら、席から少し離れたところにあるテレビに目をやった。

『昨夜未明、軍の研究機関にも属している宮田研究所で大量殺人事件が起こりました。亡くなったのは、一部の研究員と昨夜警備にあっていた警備員などの十三人だそうです。しかし、研究所の責任者で、殺された十二人の研究員とともに研究所にいたはずの宮田博士が行方不明になっており、警察は宮田博士が何らかの事情を知っていると見て調査しています。』

ニュースはその後、宮田博士がどのような人物なのかを説明している。さらに、研究所で宮田博士らが研究していた兵器についても色

々な憶測がとびかっていた。どんなに殺そうとしても死なない人造人間だとか、超強力な生物兵器だとか、新型ミサイルだとか。見ていて馬鹿馬鹿しいと思った。

第三次世界大戦が起こる少し前に、俺のいる日本という国は君主制へとその政治体制を変えた。といっても、君主である皇族が政治に口を出してくる程度で国会や内閣、総理大臣が無くなったわけじゃない。数年間はうまく機能してたと思う。というか、その頃が一番平和だった。しかし、第三次世界大戦が勃発。日本はアメリカと手を組み、戦争に加担した。この頃、天皇が変わったことが今の日本を作った、と俺は思っている。まず新たな天皇は前の天皇とは真逆の政治をし出した。前の天皇はなるべく戦争に手を貸さない方向の政治をしていた。だが、新たな天皇はすぐにアメリカと手を組むと、日本に軍を設立した。もちろん世論は反対していたけど、天皇はそんなのお構い無しに軍備を整え、戦争に本格的に介入した。

当時高校に入って間もない俺は、戦争と聞いて不謹慎ながらも胸が高鳴った。同じことの繰り返しの日々が変わる、と。刺激的な日々になってこの退屈から抜け出すことが出来る、と。実際、戦争が始まってから近隣の人が軍役でいなくなったり、ニュースでも戦争の話題で連日にぎわった。また、最前線に出て戦死した友達の兄弟もいるという話も聞いた。そういう話やニュースを見たり聞いたりする度、非日常が近づいてくるようで興奮が収まらなかった。でも、開戦から六ヶ月経った辺りから、政府の圧力はたまたま軍の圧力なのか、ニュースでは詳しい話が一切報道されなくなった。俺は内心がっかりだった。日々の生活がつまらなくなってしまうからだ。

開戦から八ヶ月経ったある日、俺の身近にいる人からついに軍に行く人間が出てしまった。その人は俺の幼なじみで同級生の女子だった。今、振り返って考えれば、その時の俺はなんと愚かでひねくれていて、そして狂っていたのだろう。軍に行く幼なじみを見て、悔しい、という気持ちが出てきてしまった。何故自分ではなく彼女が軍へ、戦場へ行くのだろう、と。彼女を見送る時、俺が彼女に向けていた眼差しは羨望と嫉妬の眼差しだった。でも、俺はわかっていなかった。俺は戦場に行っても必ず帰って来れると勝手に思い込んでいたということを。命には限りがあるということを。

開戦から一年経ち、戦争はアメリカと日本の圧倒的勝利で終結した。俺がいた街でも、戦争に勝利したことを祝う祭りやパレードが開かれて賑やかなムードだった。でも、

勝手に絶対帰って来ると思っていた彼女は

いつも隣にいて、笑っていた彼女は

軍に行くときに不安を押し殺し、自分の家族と俺の家族の前で笑顔を見せた彼女は

帰って来なかった。

## 幕開け 1 (後書き)

戦闘や異能力などが登場するのはもう少し後になります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2082j/>

---

パンドラな三毛猫 ~ 道化師の箱

2011年10月6日10時53分発行